



「シティポップの基本」が
この100枚でわかる！

これが シティポップ

空前のリバイバル！

全世界で鳴り響いている

「シティポップ」。

その熱狂を凝縮した、

入門書にして決定版。

クリエイティビティに富んだ
作品群から厳選した

アルバム100枚を
精緻にレビュー!!

「シティポップの基本」がこの100枚でわかる！

栗本 齊

星海社

211



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

パームツリー越しに海が見えるリゾートホテルのプール、コンバーチブルの車でドライブする夜景きらめく摩天楼、流行りのカフェバーで味わうトロピカル・カクテル、ダンディな男性とセクシーな女性が主人公の大人の恋……。そして、そんな風景を演出する「シティポップ」と呼ばれるスタイリッシュなポップス。

本書は、日本で生まれたシティポップの名盤100枚を紹介するディスクガイド本である。1975年に発表されたシュガー・ベイブ唯一のアルバム『SONGS』に始まり、ネオ・シティポップの旗手の一組であるYogee New Wavesの執筆時点における最新作『WIN DORGAN』までを取り上げている。基本的には1970年代後半から80年代にかけての作品に重きをおいているが、3割程度は90年代以降の作品を取り上げ、全体を読むとシティポップ草創期からネオ・シティポップが盛り上がっている2020年代頭までを俯瞰でき

るよう心がけた。

100枚のセレクトに際しては、まず「シティポップはいつ生まれたのか」という定義に悩んだ。本書ではシティポップの始祖を、シュガー・ベイブに設定している。シティポップの起源には諸説あり、はっぴいえんどがデビューしたときがシティポップの始まりという人もいれば、荒井由実こそがシティポップの元祖だろうという説もあり、南佳孝のデビュー作こそ本当のシティポップだと言われることもある。これらはどれも解釈次第では正解だ。ただ、象徴として伝えやすいのが山下達郎や大貫妙子が在籍していたシュガー・ベイブだったので、入門編としてはシュガー・ベイブから始めるのが妥当ではないかと考えている。

そもそもシティポップとはどういう音楽なのだろうか。ここではつきりしておきたいのは、シティポップは明確な音楽ジャンルを指す言葉ではないということだ。例えば、ハードロック、プログレッシヴ・ロック、レゲエ、ボサノヴァといった音楽ジャンルは、リズムのパターンや楽器などの音色といった音楽的な理論のもとに、ある程度は定義付けられ

る。しかし、シテイポップはジャンルというよりは、その音楽から醸し出される印象を重視している。もちろん、ソウル・ミュージック、AOR、ソフトロック、フュージョンといった音楽性の根幹があるとはいえ、それらのジャンルがそのままシテイポップに当てはまるというわけではなく、あくまでも雰囲気なのだ。

無理やり定義付けるとするならば、シテイポップは「都会的で洗練された日本のポップス」ということになるだろうか。「日本のポップス」と大きく括くってしまふと、どうしても湿っぽいフォークや歌謡曲が含まれてしまうので、あくまでもスタイリッシュな音楽というところでそこは差別化しておきたいところだ。それと、似たような言葉で「ニューミュージック」というものがある。ニューミュージックという言葉自体は1970年代初頭のフォークの時代から始まっており、やはり当時の歌謡曲やアンダーグラウンドなロックやフォークと差別化するための言葉として使われている。ただ、その中には、フォーク系の吉田拓郎、かぐや姫、松山千春、中島みゆきといったアーティストも含まれる。彼らは当時たしかに新しい感性を持ったアーティストとして登場したわけだが、都会的で洗練されている音楽という基準からは少々離れている。また、洗練された歌謡曲やアイドルの楽曲は

シティポップと括ることができて、ニューミュージックと呼ぶと違和感がある。よって、シティポップとニューミュージックは、似て非なる言葉なのだ。

どこまでがシティポップかと定義するのも非常に難しい。都会的で洗練された音楽という印象論をもとにセレクトすると、無限に広がってしまって。日本語で歌うジャズ・シンガー、テクニカルなフュージョン・グループ、YMO以降に多数現れたテクノポップ、またこれらを取り入れた歌謡曲やアイドルなどを含めると、いくらでも選ぶことができるだろう。そのため、ここでは「王道のシティポップ」を裏コンセプトにしている。特にこの数年でシティポップという言葉が拡大解釈されていると感じることも多いため、山下達郎やユーミンといった代表的なアーティストを軸に、いわゆる主流のシティポップから大きく外れると感じられるアーティストやアルバムは、意識的に外した。そうすることで、結果的に、メロウでアーバンでグルーヴを感じられる作品が選ばれる結果となった。

この「メロウでアーバンでグルーヴを感じられる」という表現は、シティポップを伝える言葉として最適だと考えている。ただ、実際に「メロウ」なサウンドや「グルーヴ」を感じる

じられる」リズムがどういうものなのかは、聴いてみないとわからないという方も多いだろう。その場合は、ぜひ一曲一曲聴きながら体感していただきたい。それと、こういったサウンドはシティポップの重要な側面でもあるため、アレンジや参加ミュージシャンの記述にかなりの文字数を割いている。主役のシンガーだけでなく、ミュージシャンやアレンジャーなど周辺のスタッフフィングも含めて、シティポップの世界を楽しんでいただければと思っている。

かなり乱暴な言説ではあるが、シティポップはある種のファンタジーだと考えている。例えば、シャンソンを聴くとパリの街並みや石畳を想像し、ボサノヴァを聴くとリオデジャネイロの美しいビーチを思い浮かべるように、シティポップを聴くことで冒頭に書いたような摩天楼やリゾートや大人の恋模様の世界に浸ることができるのだ。ぜひとも、どっぷりとスタイリッシュなファンタジーの世界に入り込んでいただき、メロウでアーバンでグルーヴを感じられるシティポップの世界を堪能してもらえることを願っている。では、魅惑のシティポップの扉を開けて、素晴らしい音楽体験を味わっていただこう。

PART 1 シティポップ **黎明期** 燦然と輝く名盤20枚

SUGAR BABE SONGS 18

荒井由実 COBALT HOUR 20

鈴木茂 LAGOON 22

大貫妙子 SUNSHOWER 24

加藤和彦 Gardenia 26

南佳孝 SOUTH OF THE BORDER 28

松原みき POCKET PARK 30

大滝詠一 A LONG VACATION 32

寺尾聰 Reflections 34

山下達郎 FOR YOU 36

伊藤銀次 BABY BLUE 38

佐藤博 awakening 40

吉田美奈子 LIGHT'N UP 42

杏里 Heaven Beach 44

稲垣潤一 SHYLIGHTS 46

杉真理 STARGAZER 48

角松敏生 ON THE CITY SHORE 50

松田聖子 Canary 52

杉山清貴&オメガトライブ RIVER'S ISLAND 54

竹内まりや VARIETY 56

Column1 編曲家とスタジオ・ミュージシャン 58

PART 2 シティポップ **最盛期** 進化と深化の過程で誕生した
必聴盤50枚

ティン・パン・アレー キャラメル・ママ 68

Char Char 70

ハイ・ファイ・セット LOVE COLLECTION 72

稲村一志と第一巻第百章 Free Flight 74

尾崎亜美 MIND DROPS 76

佐藤奈々子 Funny Walkin' 78

小坂忠 MORNING 80

- ラジ HEART to HEART 82
- 笠井紀美子 TOKYO SPECIAL 84
- 惣領智子 City Lights by the Moonlight 86
- 大橋純子&美乃家セントラル・ステーション CRYSTAL CITY 88
- やまがたすみこ emerald shower 90
- 細野晴臣&イエロー・マジック・バンド はらいそ 92
- 高橋ユキヒロ Saravah! 94
- サディスティックス WE ARE JUST TAKING OFF 96
- 小林泉美 & Flying Mimi Band Sea Flight 98
- 中原理恵 KILLING ME 100
- サーカス NEW HORIZON 102
- ブレッド & バター Late Late Summer 104
- 郷ひろみ SUPER DRIVE 106
- 広谷順子 BLENDY 108
- 五十嵐浩晃 愛は風まかせ / NORTHERN SCENE 110
- 池田典代 DREAM IN THE STREET 112
- 岩崎宏美 Wish 114
- EPO GOODIES 116

- 伊勢正三 スモークドガラス越しの景色 118
- 松下誠 FIRST LIGHT 120
- 井上鑑 予言者の夢 -PROPHETIC DREAM- 122
- 佐野元春 SOMEDAY 124
- 東北新幹線 THRU TRAFFIC 126
- 濱田金吾 midnight cruisin' 128
- 黒住憲五 Again 130
- 中原めいこ 2時までのシンデレラ -FRIDAY MAGIC- 132
- AB'S AB'S 134
- 八神純子 LONELY GIRL 136
- 須藤薫 PLANETARIUM 138
- 山本達彦 MARTINI HOUR 140
- 村田和人 ひとかけらの夏 142
- 国分友里恵 Relief 72 Hours 144
- 来生たかお ROMANTIC CINEMATIC 146
- 菊池桃子 OCEAN SIDE 148
- 二名敦子 WINDY ISLAND 150
- 安部恭弘 FRAME OF MIND 152

1986 オメガドライブ **Navigator** 154

楠瀬誠志郎 **冒険者たち** 156

飯島真理 **Coquettish Blue** 158

崎谷健次郎 **Realism** 160

鈴木雅之 **RADIO DAYS** 162

木村恵子 **STYLE** 164

SING LIKE TALKING **TRY AND TRY AGAIN** 166

Column2 シティポップ・サウンドのルーツ 168

PART 3 シティポップ **再興期** 受け継いだ遺伝子からさらなる
変容を遂げる次世代盤30枚

今井美樹 **Lluvia** 178

Original Love **結晶 -SOUL LIBERATION-** 180

小沢健二 **LIFE** 182

GREAT3 **Richmondo High** 184

具島直子 **miss.G** 186

古内東子 **Hourglass** 188

- キリンジ ペイパードライヴァーズミュージック 190
- 比屋定篤子 ささやかれた夢の話 192
- benzo DAYS 194
- NONA REEVES Friday Night 196
- paris match type III 198
- 富田ラボ Shipbuilding 200
- 畠山美由紀 Wild and gentle 202
- 流線形 CITY MUSIC 204
- Lamp 恋人へ 206
- 土岐麻子 TALKIN' 208
- 高田みち子 TOKYO GIRLS TALK 210
- 一十三十一 CITY DIVE 212
- ジャンク フジヤマ JUNK SCAPE 214
- ウワノソラ ウワノソラ 216
- シンリズム NEW RHYTHM 218
- LUCKY TAPES Cigarette & Alcohol 220
- 星野みちる 黄道十二宮 222
- ブルー・ペパーズ Retroactive 224

SPiCYSOL **Mellow Yellow** 226

never young beach **STORY** 228

1983 渚にきこえて 230

Natsu Summer **HAYAMA NIGHTS** 232

GOOD BYE APRIL **Xanadu** 234

Yogee New Waves **WINDORGAN** 236

*Column***3** 国内外のネオ・シティポップ 238

本書掲載アルバムプレイリスト 247

おわりに 248

レビューページの見方

レーベル

一部の例外を除き、初出のレーベル名を掲載しています。

発売年・月・日

オリジナル盤の発売年月日を掲載しています。

アーティスト名

アルバム名

大滝詠一

A LONG VACATION

- 01. 夏は天然色
- 02. Velvet Mood
- 03. カサリテ風流にて
- 04. Pop-pi-doo-bi-doo-ba-ku
- 05. 静かなる夜に
- 06. 夏のウエスタンアイ
- 07. スロー・ラブ・レイン
- 08. 雲を渡る風
- 09. FUNKY
- 10. さらばシベリア大陸

ALONG VACATION



日本のポップス史に燦然と輝く大傑作
清涼感に溢れた名曲の数々は、永遠のサマー・アンセムである

日本のポップス史に燦然と輝く大傑作でもある。でも敢えて、シテイポップの切り口でじっくりと語りたい特別な一枚でもある。なぜなら、これはこれまでになかった清涼感に溢れた名曲の数々は、永遠のサマー・アンセムである。

大滝詠一には様々な顔がある。日本語ロックの元祖であるはっぴいえんどのボーカリスト、シユガー・ベイブを世に出したプロデュサー、松田聖子や小林旭にヒット曲を提供したソングライター、誰かが歌えるCMソングの職人、生粋のレコード・コレクターなど、もうひとつ重要なことを加えるならば、ナイアガラ・サウンドを発明したことだろう。いくつもの楽器を兼ねてレコー

ディンク、壁のような音圧にする手法は、フィル・スペクターが考案したウォール・オブ・サウンドの翻案といえるが、日本のポップスにしっかりと根付かせただけでなく、あのサウンドで夏のイメージを喚起させるようになったのは間違いなく大滝詠一の影響である。

「カナリア群島にて」の透明度の高い清涼感、「恋するレイン」の壮大なのにセンチメンタルな響き、50人以上のミュージシャンを起用し、きめ細かな職人的アレンジを施した楽曲は、どれも一聴して大滝詠一とわかるサウンドである。

「買ってオールディーズのポップスへのオマージュを込めた」

ジュを怠らないのも、彼の個性である。パートナー、バカラックのメロディを彷彿とさせる「雨のウェンズデイ」、ビーチ・ボーイズの「節」を引用したギンギン歌「FUNX4」、そしてジョー・ミークがプロデュースしたジョン・レイトンの「霧の中のジョニー」をヒントにした「さらばシベリア大陸」は、太田裕夫に提供して彼女の代表曲となった。

ロックンロールからバラードまで、様々なタイプの楽曲が収められているのも魅力だ。大ヒットした要因には、松本隆によるロマンティックイズムに満ちた言葉の数々、永井博が描いたジャケットの理想的なリゾートの風景、そして「長期休暇」というこれ以上ない見事なタイトルもセクスムも忘れてはいけない。これらがすべて揃った完成度の高いタイトル・アートは、後にも先にも存在しないのではないだろうか。

収録曲

オリジナル盤の収録曲を掲載しています。

ジャケット

一部の例外を除き、オリジナル盤のジャケットを掲載しています。

「シティポップの基本」

100枚

JAPANESE CITY POP 100



シティポップ
黎明期

燦然と輝く名盤20枚



awakening
SATO featuring Wendy Matthews

PART 1



SUGAR BABE

シュガー・ベイブ

SONGS

1975年4月25日発売
ナイアガラ

01. SHOW
02. DOWN TOWN
03. 靈気楼の街
04. 風の世界
05. ためいきばかり
06. いつも通り
07. すてきなメロディー
08. 今日はなんだか
09. 雨は手のひらにいっぱい
10. 過ぎ去りし日々 “60's Dream”
11. SUGAR



稀有なヴォーカリスト2人が対等に
フロントに立っていたことが奇跡的

異

論反論ある方もいるだろうが、シテイポップの源流をシュガー・ベイブと設定した上で本書を進めていきたい。その理由はいくつかある。まず、このアルバム以前にここまで明るく軽やかなポップ作品はないということ。シテイポップのアイコンである大瀧詠一率いるナイアガラ・レーベルの第一弾作品であるということ。そして何より、山下達郎と大貫妙子という二人の天才を輩出したことが大きい。すでに彼らの才能は本作で大いに開花しており、後に日本のポップ・ミュージックの流れを大きく変えていくのである。

ただ、シュガー・ベイブが活動していた頃はフォーク全盛期であり、ロック・シーンもブルース・ロックやハード・ロックがメイン。1975年の年間チャートを見ると、上位は井上陽水、かぐや姫、よしただたくろうなどの名前が並んでいる。た

とえフォーキーな楽曲があっても、テンションコードや分数コードを多用し、スタイリッシュなコーラスを配したシュガー・ベイブは、あくまでもマニアックでオルタナティブな存在だったのだ。

ともあれ本作を聴けば、彼らのポップ・センスに圧倒される。冒頭の「SHOW」からワクワクするし、何か新しいことが始まりそうな導入部は本作の醍醐味である。フロントマン二人に加え、村松邦男、鰐川己久男、野口明彦という5人のアンサンブルは、ロック・バンドならではの疾走感を感じさせるのが特徴だ。そして歌詞の中でも「僕は君を街へ連れ出そう」と歌い、都会派ポップスをアピールしている。この感覚は最も有名な「DOWN TOWN」の他、「すてきなメロディー」や「今日はなんだか」にも共通しており、彼らの歌詞とサウンドの大きな特徴となっている。一方

でフィル・スペクターの影響を受けた「雨は手のひらにいったばい」や、しっとりとした「過ぎ去りし日々“60's Dream”」のようなオールディーズ系の王道路線では、山下達郎の趣味人的な一面が表れている。

山下達郎だけでなく、大貫妙子がしっかりと前面に押し出されていることも重要だ。もともと彼女のデモを作るために集まったのがバンドの成り立ちだったこともあり、「曇気楼の街」や「風の世界」、「いつも通り」といった名曲群の完成度は高く、そこに漂うメロウな雰囲気も素晴らしい。本当に稀有なヴォーカリスト二人が対等にフロントに立っていたことが奇跡的。そして二人の声とグルーヴィーかつメロウなサウンドが、輝かしい理想のシティへと連れていってくれるのだ。

荒井由実

あらいゆみ

COBALT HOUR

1975年6月20日発売
Express

01. COBALT HOUR
02. 卒業写真
03. 花紀行
04. 何もきかないで
05. ルージュの伝言
06. 航海日誌
07. CHINESE SOUP
08. 少しだけ片想い
09. 雨のステイション
10. アフリカへ行きたい



ユーミンは声高らかに、
シティポップの幕開けを宣言した

シ ユガー・ベイブが音楽シーンに静かな影響を与えたシティポップの通奏低音だとしたら、ユーミンは声高らかにその幕開けを宣言した存在だ。荒井由実としてデビューした彼女は、初のアルバム『ひこうき雲』（1973年）と2作目『MISSILE』（1974年）がすでに歴史的な名盤だが、これらはどちらかというと内省的で私小説的な印象が強い。彼女がユーミンというアイコンとなり、都市を舞台にしたスタイリッシュなポップ・チューンを作り始めたのは3作目となる本作からである。

飛行機のエンジン音に導かれながらキラキラとしたキーボードの音色が聞こえ、怒濤のグルーブへと突入する「COBALT HOUR」に始まり、アップパーな「アフリカへ行きたい」のエンディングで再び飛行機の音が聞こえてくるという循環構造。

そのユニークさもまた、彼女の遊び心とその背景にあるポップな感性の賜物だ。

とにかく本作は、ペーター佐藤が描いたアートワークのように、カラフルな音色に満ち溢れている。そして「**レージュの伝言**」や「**CHINESE SOUP**」のようなオールディーズの意匠を借りた軽快なナンバーが、まさにシティポップという新しい時代の到来を予見しているようだ。本作以前の作風に近いメロウな「**卒業写真**」や「**雨のステイション**」なども、洗練度が高まっており、あくまでもモノクロではなくフルカラー。「**少しだけ片想い**」には山下達郎と吉田美奈子がコーラスで参加しており、これだけでもシティポップ感覚は抜群だ。もちろん、演奏は、松任谷正隆、細野晴臣、鈴木茂、林立夫というティン・パン・アレーの面々がかつちりとした演奏で引き締めており、彼

らのプレイヤー、アレンジャーとしての成長ぶりも目を瞠みはるものがある。そしてサウンド面の充実ぶりが、いちシンガー・ソングライターからシティポップのスターへと導いていったのである。

それにしても、ユーミンが描く都会のなんてロマンチックなことか。首都高速から湘南へ至る夜明けの高速道路を滑走路に見立て、彼の母親に会うために飛び乗った列車の車窓から黄昏たそがれていく街を見つめ、梅雨時の駅に佇みながらあの人がいないかと雑踏を目で追いつける。そこには誰もが共感できる都会のドラマがあり、胸を打つようなメロディと言葉が溶け合っていく。こういった都会を舞台にした恋愛模様は、アルバムを重ねるごとに彼女の専売特許となり、多くのフォロワーを生んでいく。まさしくシティポップの原点がここにあるのだ。

鈴木茂

すずきしげる

LAGOON

1976年12月5日発売
PANAM

01. LADY PINK PANTHER
02. デビル・ゲーム
03. BRANDY WINE
04. TOKYO・ハーバー・ライン
05. HAWAIIAN
06. 走れラビット
07. コルドバの夜
08. ALMERÍA
09. 8分音符の詩



ホノルル・レコーディングならではの
ゆるやかな雰囲気漂うポップな作品

は つぴいえんど及びティン・パン・アレーのメンバー、日本を代表するセッション・ギタリスト、ニューミュージックから歌謡曲まで幅広いジャンルで活躍するアレンジャー。鈴木茂は様々な顔を持つマルチ・ミュージシャンだ。もちろん、ソロ・アーティストとしても傑作を多数生み出しており、サンフランシスコとロサンゼルスで録音されたファースト・アルバム『BAND WAGON』(1975年)は、ソリッドなファンキー・チューンが満載の名盤として高く評価されている。

ただ、シティポップという切り口だと、この2作目を推したい。こちらはホノルル・レコーディングならではのゆるやかな雰囲気が漂うポップな作品だからだ。とりわけ代表曲となった「LADY PINK PANTHER」の心地良さは格別だろう。ボサノヴァ風のリズムと丸みを帯びたギターの音色、

少しゆるい雰囲気醸し出すヴォーカルによるキヤッチーなメロディには身体が弛緩させられる。まさに究極のリゾート・ポップだ。ゆったりとした三拍子のリズムが印象深い「デビル・ゲーム」、サックスとエレクトリック・ピアノの音色がスタイリッシュな「TOKYO・ハーバー・ライン」、エキゾチック・サウンドの要素を取り入れた「コルドバの夜」、ジャジーなアレンジが秀逸な「8分音符の詩」など、どこを切り取ってもリラックス・ムードだ。

ハワイ録音とはいえ、ミュージシャンは日本人をメインに起用しているのも前作とは違う。細野晴臣、林立夫、矢野誠、浜口茂外也、ジョン山崎といったティン・パン・アレー周辺のミュージシャンに加え、米国のジャズ・ピアニストであるマーク・レヴィンも参加。その演奏力を披露するグ

ルーヴィーな「BRANDY WINE」やまったりとしたヒーリング・ミュージックのような「HAWAIIAN」などのインスト曲もユニークで、アルバムにゆるやかな起伏を生み出している。ヴォーカリストやプレイヤーとしてだけでなく、サウンド・プロデューサーとしての才能も遺憾なく発揮した作品ともいえる。

忘れてはいけないのが、ヴォーカル曲すべてを作詞した松本隆の存在だ。歌詞自体はリゾートを前面に押し出しているわけではなく、東京、横浜、スペインと舞台も様々。それがトロピカル風味のサウンドと訥々^{とつとつ}としたヴォーカルで表現することによって、ファンタジックで書き割りのな世界に変換している。この路線は進化し続け、『Caution!』（1978年）や『TELESCOPE』（1978年）でさらにポップ路線を追求していくのである。

「シティポップの基本」

100枚

JAPANESE CITY POP 100

OKYO SPECIAL KINIKO KASAI

Raiie
HERITAGE

CRYSTAL CITY

BLENDY

DAVID WOODMAN

POPPES
apo

Chitose
the
Kawaguchi

Saravali

MORNING

シ テ イ ポ ッ プ
最 盛 期

進化と深化の過程で誕生した必聴盤50枚

PART 2

Radio Days

MAINTENANCE HOUR

sadistics

ROMANTIC CINEMATIC
TAKAO
KOSUGI

GARASRI

NORTHERN SCENE

AB'S

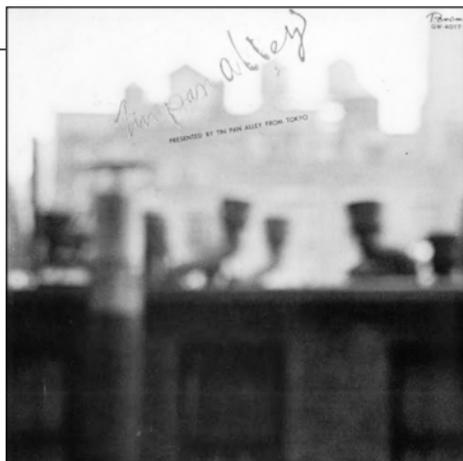
ティン・パン・アレー

ティン・パン・アレー

キャラメル・ママ

1975年11月25日発売
PANAM

01. CAMEL RAG
02. CHOPPERS BOOGIE
03. はあどぼいど町
04. 月にてらされて
05. CHOO CHOO GATTA GOT '75
06. SHE IS GONE
07. ソバカスのある少女
08. JACKSON
09. YELLOW MAGIC CARNIVAL
10. BALLADE OF AYA



細野晴臣、鈴木茂、林立夫、松任谷正隆——70年代シティポップ黎明期に
欠かすことのできないミュージシャン集団の第一作目

シ
ティポップを語る上で、山下達郎や松任谷由実といった表舞台のスターではなく、屋台骨を支えたミュージシャンに触れないわけにはいかない。そして、70年代のシティポップ黎明期（れいめい）にどうしても欠かせないミュージシャン集団がキャラメル・ママ、その後ティン・パン・アレーと名乗っていた4人組である。メンバーは細野晴臣、鈴木茂、林立夫、松任谷正隆。いずれも言わずと知れたトップ・ミュージシャンであり、その後の日本のロックやポップスの歴史に名を残す面々だ。もはや説明不要ともいえるメンバーだが、天才的な彼らが集まってアルバムを作るといっても、火花が散るようなセッションになるわけではない。この1作目のアルバムも、個々が自分がやってみたい楽曲を持ち寄り、自由にレコーディングしたというラフなイメージだ。まずオーブニングの

「CARAMEL RAG」から力が抜けている。効果音を取り入れたコミカルなニューオーリンズ・スタイルのナンバーで、メンバー4人のみで制作した楽曲はこの曲のみ。他はゲスト・ヴォーカルやミュージシャンを多数交えて、多彩な内容になっているのだ。

細野晴臣はニューオーリンズのセカンド・ライオンを取り入れた「CHOO CHOO GATTA GOT '75」とオリエンタル・テイストの「YELLOW MAGIC CARNIVAL」でイニシアティヴをとっているが、いずれもソロ作品のような個性的な出来栄え。鈴木茂は、見砂和照や田中章弘などを従えた軽快な「はあどぼいんど町」と、南佳孝のヴォーカルをフィーチャーした「ソバカスのある少女」を披露。いずれもリラックした心地良いナンバーである。クールなのは林立夫のセクション。後

藤次利のスラップ・ベースと高中正義のギターが強烈なファンキー・チューン「CHOPPERS BOO GIE」や、ジョン山崎のヴォーカルを配した「SHE IS GONE」といづれも洋楽色が強い。松任谷正隆は、荒井由実作詞のメロウな「月にてらされて」と、山下達郎らのコーラスをバックに英語で歌う「JACKSON」で才能を見せつける。そして最後は松任谷のキーボード多重録音による奇妙な小品「BALLADE OF AYA」で締めくくるのだ。

こうやって通して聴くと、それぞれが好きなきとをやっつけて統一感はない。しかし、逆にいえば彼らの引き出しは膨大にあり、その叡智が集まったからこそ、ユーミン、小坂忠、吉田美奈子などの作品における数々の名演を生んだのだ。進る才能の集合体が生み出した雑多な本作こそ、ティン・パン・アレーらしいといえるのである。

Char

チャー

Char

1976年9月25日発売
SEE-SAW

01. SHININ' YOU, SHININ' DAY
02. かげろう
03. IT'S UP TO YOU
04. 視線
05. NAVY BLUE
06. SMOKY
07. I'VE TRIED
08. 空模様のかげんが悪くなる前に
09. 朝



問答無用のギター・ヒーロー Charの才能が迸る、
ギター&ヴォーカルを思う存分味わうことができる傑作

問

答無用のギター・ヒーローである。加えて、原田真二、世良公則と並び、お茶の間にロックを持ち込んだといわれるロック御三家のひとつでもある。実際、「気絶するほど悩ましい」(1977年)、「逆光線」(1977年)、「闘牛士」(1978年)といったシングル曲リリースの際にはテレビ出演することもあり、アイドル的な人気もあった。しかし、このソロ・デビュー作を聴くと、あまりにもそのイメージと乖離していることに驚かされる。

そもそもCharこと竹中尚人は天才少年として音楽シーンに登場している。中学生ですでにプロ顔負けのプレイを披露し、様々な活動を経て1973年には伝説のバンド、スモーキー・メディスンの結成にも関わった。そして、21歳になり満を持して自身の名義による作品を発表したのが本作

だ。よって、いい意味で怖いもの知らずというか自由奔放。Charの才能が迸るギター&ヴォーカルが思う存分味わうことができる傑作だ。

実際には、このジャケット写真から想像できる通り、大人っぽい雰囲気、いわゆるAOR的なロックを披露している。冒頭の「SHININ' YOU, SHININ' DAY」を聴いてみてほしい。クールなカッティング・ギターと空気を切り裂くほどのエモーショナルなソロ、アーバン・ファンク的なビートを繰り出すドラムスとベースのコンビネーション、涼しげなエレクトリック・ピアノやキーボードの音色、そして英語で歌う垢抜けたCharのヴォーカルと、とにかく文句の付けどころがない余裕あふれる大人のロックを提示してくれる。また、すっかりCharの代名詞となった「SMOKY」では、さらにファンキーでトリッキーなギターや

バンド・アンサンブルの妙が味わえる。この2曲を聴いて心を動かされ、ギターを始めたバンドマンも多いはずだ。

本作では、Charのギターはもちろんだが、バンド・メンバーが非常に重要であることは音を聴けば明白。佐藤準、ロバート・ブリル、ジョージ・マステイツチ、ジェリー・マーゴシアンという4人が支えており、質感はほとんど洋楽ロックといってもいい。しかし、夏の情景を描いた「かげろう」、先行シングルだったブルース・ロック風の「NAVY BLUE」、レイジーな雰囲気が漂う「空模様のかげんが悪くなる前に」、中盤からラテン・ファンク風に展開する「朝」という日本語曲は、洋楽的なサウンドでありつつも和の香りが匂い立つ。このような絶妙なバランスこそがCharの魅力であり、本作を名盤たらしめているのである。

ハイ・ファイ・セット

ハイ・ファイ・セット

LOVE COLLECTION

1977年2月5日発売

Express

01. オン・エニイ・サンデー
02. 雨のステイション
03. 眠い朝
04. まぶしい貴方
05. 夜の傷
06. クリスタル・ナイト
07. フィーリング
08. カントリー・ボーイ
09. 夢に見たジャマイカ
10. 中央フリーウェイ



ポップス系のコーラス・グループというカテゴリでいうならば、ハイ・ファイ・セットは誰もが認める第一人者ではないだろうか

シ
ヤズや歌謡曲ではなく、ポップス系のコーラス・グループというカテゴリでいうならば、ハイ・ファイ・セットは誰もが認める第一人者ではないだろうか。もともとフォークやソフトロックを歌っていた赤い鳥の5人のメンバーが音楽性の違いで分裂し、山本潤子、山本俊彦、大川茂の3人が新たに結成したユニットである。ちなみにグループの名付け親は細野晴臣。1975年に荒井由実の名曲「卒業写真」でデビューした彼らは、1977年にモリス・アルバートのヒット曲になかにし礼の日本語詞を乗せた「フィーリング」をカヴァーする。比較的原曲に忠実ながらサビのコーラスを3人のハーモニーでスタイリッシュに組み立て直すことで大ヒット。その勢いそのまま発表したのが3作目の本作である。「フィーリング」のしっとりとした路線を期待す

るならば、「**雨のステイション**」に尽きる。荒井由実ならではのメロウなバラードを、シルキーなコーラス・ワークで切なく表現。特に山本潤子の澄んだ声の美しさは絶品だ。同じ路線では「まぶしい**貴方**」もコーラスを生かした都会的なAORナンバーに仕上がっている。

一方で、軽快なアップテンポで華やかなハーモニーを展開する楽曲群も、本作では大きな聴きどころだ。オープニングの「**オン・エニイ・サンデイ**」は、オートバイのドキュメンタリー映画『**栄光のライダー**』（1971年）の主題歌カバーという少し珍しい一曲。洗練されたソフトロックの原曲を自分たちのテイストに上手くアレンジしている。華やかさという点では「**クリスタル・ナイト**」も傑作だ。グルーヴィーなりズムがめくるめくハーモニーをカラフルに彩っており、エンター

テイナーとしての魅力をアピール。そして、ラストを飾る「**中央フリーウェイ**」はもちろんユーミンの名曲カバーだが、本家や共作となった庄野真代のヴァージョンと比べても格段に鮮やかでドリーミーな演出が成されており、ハイ・ファイ・セットの実力とセンスがしっかりと確認できる。

全編のアレンジは瀬尾一三。赤い鳥時代からの付き合いとなる村上秀一の他、高水健司、後藤次利、松原正樹、吉川忠英、深町純、佐藤準、大谷和夫といった多数のミュージシャンが参加し、3人のコーラス・ワークを引き立てるようにスタイリッシュなサウンドを作り上げている。あくまでもコーラスが主役ではあるが、バックトラックのクオリティにもこだわることで、より高い音楽性を感じさせるアルバムだ。

「シティポップの基本」

100枚

JAPANESE CITY POP 100

ORIGINAL
LOVE
SOUL LIBERATION

LIFE
KENJI OZAWA

Great
Richmond
Fish

Julie
HEART to HEART

paris match
type

OKA Hiroyuki
Honey

シ テ イ ポ ッ プ
再 興 期

受け継いだ遺伝子からさらなる変容を遂げる次世代盤30枚

PART 3

RHYTHM

beach

AYSOL

Tellus

Beach

benzo
DAYS

Liuvia

Liuvia

Liuvia

Liuvia

Liuvia

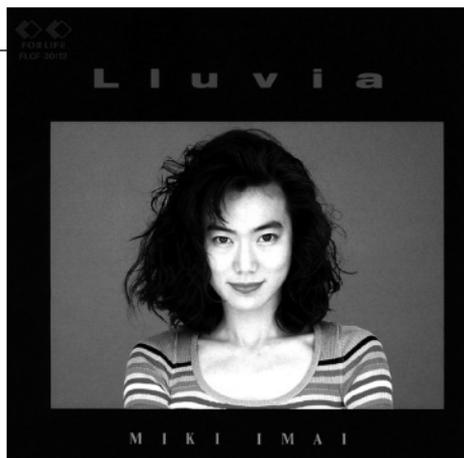
今井美樹

いまいみき

Lluvia

1991年9月7日発売
フォーライフ

01. SATELLITE HOUR
02. ひとりになってみよう
03. 夢の夜
04. あこがれのままで
05. プラスα
06. Tea For Two
07. Lluvia
08. 笑顔
09. 黄昏
10. DISTANCE



シングル・カット無しのアльバムのみでのリリースという大勝負に出た本作。にもかかわらず、アльバム・チャートで首位を獲得し、90万枚を超える大ヒット

ユーミンの登場以降、都会的な女性ヴォーカリストというポジションでは、今井美樹ほど強力なアーティストはいないだろう。モデルや女優としての活動が先行した彼女は、下手をすれば俳優にありがちの片手間に歌うイメージをまといながら消えゆく可能性もあったはずだが、作品を発表するごとに目覚ましい成長を見せ、本格的な女性シンガーとしてのブランディングを真事に構築したのだ。

1986年に歌手デビューして以来、発表した作品は全てがシテイポップといってもいいスタイリッシュなものだが、ここで推しておきたいのが1991年に発表した6枚目のオリジナル・アльバムである。すでに「彼女と「TIP ON DUO」(1988年)や「瞳がほほえむから」(1989年)といったヒット曲を連発していた時期にもかかわらず、

なんと本作からはシングル・カットは一曲もない。アルバムのみでのリリースという大勝負に出たのだが、それでもアルバム・チャートで首位を獲得し、90万枚を超える大ヒットとなった。いかに当時の勢いが凄かったのかがよくわかるだろう。

今井美樹はいわゆるシンガー・ソングライターというよりは、楽曲提供を受けて輝くタイプのシンガーだ。本作では自身でも数曲作詞をしているが、メインは岩里祐穂によるもの。また、作曲家は上田知華を始め、MAYUMI、柿原朱美、山口美央子と女性で固めているのも特徴だ。遠距離恋愛をテーマにきらびやかなAORサウンドでコーティングした「SATellite HOUR」、彼女らしい前向きにやり直そうというグルーヴィーな失恋ソング「ひとりになってみよう」、道ならぬ恋をほめかす極上メロウ・チューン「夢の夜」と、冒

頭の3曲だけでも堂々たる傑作であることがわかる。他にもミディアム・テンポが心地良いタイトル曲「Lluvia」、アコースティック・バラードの傑作「黄昏」、メロウ・ソウル風のアレンジが美しい「DISTANCE」と文句の付けどころがない名曲が揃っている。

ポップながらも透明感に満ちたアレンジを手掛けたのは、デビュー当時から付き合いとる佐藤準。彼のキーボードを主軸に、山木秀夫、青山純、美久月千晴、今剛、笛吹利明といったトップ・ミュージシャンが勢揃いしており、悪いはずがないというもの。今井美樹にとって初期の集大成といってもいいだろう。そして、本作のわずか2ヶ月後には、岩里祐穂、上田知華、佐藤準というゴールデン・トリオとともに作られた屈指の名曲「PIECE OF MY WISH」が大ヒットするのである。

Original Love

オリジナル ラヴ

結晶 - SOUL LIBERATION -

1992年5月1日発売
イーストワールド

01. 心理学
02. 月の裏で会いましょう
(アルバムヴァージョン)
03. ミリオン・シークレッツ・オブ・ジャズ
(アルバムヴァージョン)
04. スクランブル
05. 愛のサーキット
06. フレンズ
07. スキャンダル
08. フェアウェル フェアウェル
09. ヴィーナス
10. セレナーデ



シティポップの文脈で彼らを聴くならば、やはり90年代前半の作品群。
なかでもメジャー2作目となる本作は、バンドとしても非常に充実した傑作

オリジナル・ラヴが果たしてシティポップなのかどうかはさておき、彼らが70年代のシティポップ的なサウンドを引き継ぎ、90年代の渋谷系以降のグルーヴィーなポップスへと継承していったことは間違いない。その大きな潮流を作ったという意味においては、ピチカート・ファイヴやフリッパーズ・ギターよりも偉大といえるかもしれない。

シティポップの文脈で彼らを聴くならば、やはり90年代前半の作品群だ。なかでもメジャー2作目となる本作は、バンドとしても非常に充実した傑作である。まず一曲を挙げるならば、ドラマの主題歌に使用された「月の裏で会いましょう」だろう。グルーヴするリズム・セクション、ワウを駆使したファンキーなカッティング・ギター、 Hammond・オルガンやホーンを利かせたアンサンブル

ル。そこに呼応する田島貴男のエモーショナルなヴォーカルは圧倒的。そして本作の先行シングルだった「ヴィーナス」も素晴らしい。マーヴィン・ゲイを思わせるたゆたうミディアム・グルーヴに、ソウルフルなヴォーカルが絡み合っていく展開の心地好さは格別だ。

このレコーディング時のバンド・メンバーは、田島貴男の他に村山孝志、木原龍太郎、森宣之、宮田繁男の5人。サウンドの要であるベースには井上富雄がサポート・メンバーとして参加している。当時はライブを積み重ねてメンバーの一体感が高まっていたこともあり、純粹にバンド・サウンドが全面に出た作品といってもいいだろう。前述の楽曲以外にも、軽快なグルーヴの「フレンズ」やメロウな「フェアウェルフェアウェル」もシテイポップの範疇に入れてしまってもいいだろうが、

その一方で緊張感に満ちた「心理学」やクールな「ミリオン・シークレッツ・オブ・ジャズ」などは、どちらかというと90年代初頭ならではのアシッド・ジャズやクラブ・ミュージックとして評価すべきかもしれない。このあたりが「シテイポップか否か」という基準の分水嶺でもあるのではないだろうか。

しかし、その後大ヒットを記録する「接吻」(1993年)は、あきらかに山下達郎から綿々と続く和製ソウルの流れといえるし、ソウル、ファンク、ブラジル音楽などを果敢に取り入れている様は、70年代から80年代に活躍した先達が辿ってきたスタイルに近い。そういった意味でも田島貴男率いるオリジナル・ラヴは、シテイポップの流れを汲むアーティストとして評価するのは間違っていないのだ。

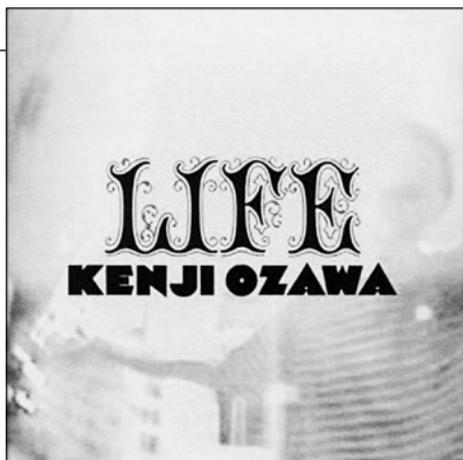
小沢健二

おざわけんじ

LIFE

1994年8月31日発売
イーストワールド

01. 愛し愛されて生きるのさ
02. ラブリー
03. 東京恋愛専科・または恋は言ってみりゃ
ポディー・ブロー
04. いちょう並木のセレナーデ
05. ドアをノックするのは誰だ？
06. 今夜はブギー・バック
07. ほくらが旅に出る理由
08. おやすみなさい、仔猫ちゃん！
09. いちょう並木のセレナーデ



まだバブルを引きずった躁状態の東京を彩るBGMとして、
これほどまでフィットした作品はなかっただろう

東

京の街をこれほどまでにキラキラと煌く光景として描いた作品は、これまでになかったかもしれない。小沢健二の2作目となる本作は、

渋谷系を代表する作品であると同時に、90年代シテイポップの大きな指標といってもいいだろう。

80年代後半に、小山田圭吾らとともにフリッパーズ・ギターとしてきら星の如く登場した小沢健二は、バンド解散後ソロ活動を開始。初のソロ・アルバム『犬は吠えるがキャラバンは進む』（1993年）は、フォーク・ロックやカントリー・ロックを取り入れたアーシーな感覚と独特の言葉の使い方が斬新だった。しかし2作目では、フォーク的な雰囲気やカントリー・フレイヴァーをほのかに残しつつも、ソウルやファンクを大胆に導入し、軽快なグルーブで包み込んでいる。

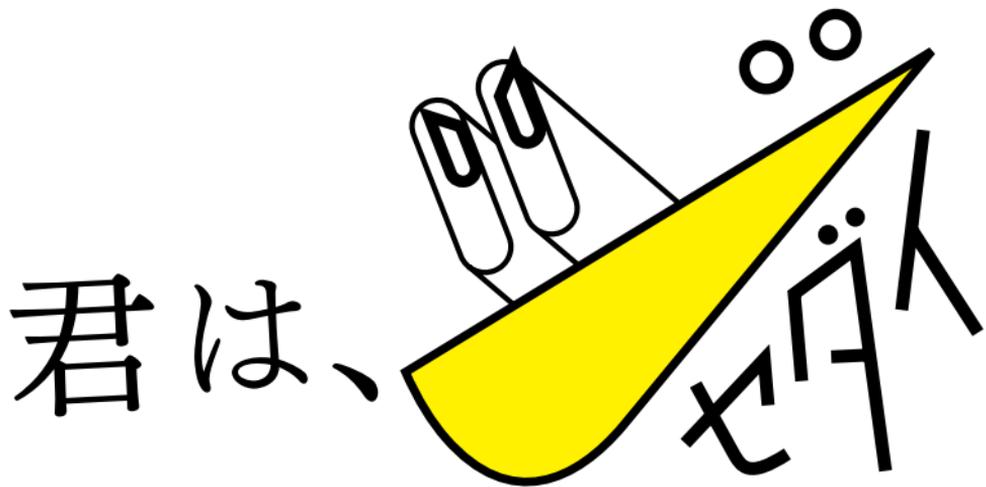
とにかくオーブニングから小沢健二節が効きま

くつているのがわかるだろう。シングル・ヒットにもなった「愛し愛されて生きるのさ」はフアンキーなりズムに乗せた和製ソウルで、歌詞に「いとしのエリー」なんていうキーワードを忍ばせるあたりもユニークだ。また、ニューオーリンズ・ファンクとサンバを合体させた「東京恋愛専科・または恋は言ってみりゃボディ・ブロー」や、疾走感に満ち溢れた「ぼくらが旅に出る理由」は、華やかなホーン・セクションを含むサウンドだけでなく、どこか青春の香りを残した歌詞にも注目が集まった。そして、スチャダラパーと共演した「今夜はブギー・バック」は誰もが納得の名曲であり、ヒップホップを取り入れたポップスの雛形にもなっている。

こういったグルーヴを生み出したバック・メンバーも特筆すべきだろう。東京スカパラダイスオ

ーケストラの青木達之とホーン隊、角松敏生や久保田利伸などとも交流のある中村キタロー、ヒックスヴィルの木暮晋也と真城めぐみなどは非常に重要な存在だ。イントロやフレーズには洋楽の引用が多いことも指摘されたが、ポール・サイモン、ベティ・ライト、ジルベルト・ジルなどをセレクトするセンスの良さもあり、そこは渋谷系世代特有でもある。ちなみに、ジャケットのタイトル・ロゴは、スライ&ザ・ファミリー・ストーンの初期のアルバムとほぼ同じなのも微笑ましい。

まだバブルを引きずった躁状態の東京を彩るBGMとして、これほどびつたりな作品はなかった。それだけにメロディメイカーぶりが見え隠れする「いちよう並木のセレナーデ」や「おやすみなさい、仔猫ちゃん！」が心に沁みる。小沢健二の都会的な魅力がどの曲にも表れた傑作だ。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!